

母のこと



井上妙澄 (2010年3月28日)

仏前結婚式で法話する母

副住職  
井上由美子

## 母のこと

釋 由 真

密葬の遺影の写真が欲しいと仰る方がいらしたので、このような印刷物を思いつきました。

十一月八日の午前二時頃から、片付け物をしながら母に寄り添っていました。呼吸の様子がおかしいと、外の家族にメールをしたのが午前三時半過ぎ。胸騒ぎがしたので身支度を整えようと入浴して簡単な食事をして戻ったとき、母の呼吸は止まっていました。部屋を出たときと同じ体勢、同じ表情で、特に苦しんだ様子は見られず、静かな気持ちで妹を呼ぶことができました。息を引き取ったのは午前四時半頃と思われる。

病院も施設も嫌、お寺で死にたいと言う母は、本堂の隣の部屋で療養していました。要介護5の病人を在宅で診るのは難しいというアドバイスも受けましたが、家族や仏婦の協力を得て何とか母の望みを叶えられたことを有難く思います。そして、肺炎や褥瘡に苦しみながらよく頑張った母を偉いと思います。

そこには在宅介護に対する手厚い支援体制がありました。優秀なケアマネージャーに助けられました。最後は毎日来てくださっていた「わたらせ在宅診療所」の看護師と症状に応じて的確な診断をしてくださった医師のみなさま、唯一の楽しみであったお風呂「訪問入浴するます」の方々、そして「わくわく指定訪問介護事業所」の優しいヘルパーさんたち。母を大切にしていただけ、感謝の気持ちでいっぱいです。

すべてが終り、みなさまからはお褒めの言葉をいただきますが、私自身を振り返るとその介護の仕方について反省や後悔の思いがあ

るのです。でも、本堂に横たわる母の顔は安らかで美しく、病苦を離れたことを伝えてくれているようで、自分を責める私を癒してくれました。

亡くなる前夜、最後の食事はホタテと鮭のお刺身を一切れずつと私が漬けた胡瓜の糠漬のみじん切り、カレーのじゃが芋小指の先ほどをお粥で食べました。境内の枇杷の葉のお茶とともに。その前日には、少しですが鰻も食べました。

外出が難しい私に代わって、母の食べたいものを聞き出して買ってくるのは上の妹典子の役目でした。足の悪い私のために、まだ少し歩けた頃の母をお風呂に入れてくれたのも彼女でした。外で暮らす下の妹弘子は、私が築地本願寺に仕事に行くときのお寺の留守番、母の見守りや散髪をしてくれました。お粥にのせて毎食食べていた露味噌「ぼっけ味噌」は彼女の差し入れです。

最後の病床を思うと辛い気持ちになります。友人たちとたくさん旅行をし、音楽を聴き歌い、皆さまに愛された母は幸福な一生だったと思います。何より、宗願寺を賑やかなお寺にしてくれたことに感謝しています。父がお寺を支えるために外で思いっきり働いたのは、母が僧侶として法を伝え続けたからでした。

今回大活躍の住職、坊守、二人の可愛らしい曾孫たち、後継者も育ちました。私はこれから彼らとともにこのお寺を守っていきます。坊守は「多くの方々がお参りしてくださるお寺にしたい」とよく申します。母も喜んでいことでしょう。

十一月四日の午後七時半頃「あーんして」と、お粥に鱈子をのせて口に運んだときのことでした。恐ろしく緊張した表情で「今まで本当に有難うございましたーっ」と、とても大きな声で叫んだのです。今思えばお別れの言葉でした。

三年ほど前の冬、鬱状態で認知症がひどい時期がありました。その頃、炬燵の周りに落ちていたしわしわの半紙に書かれていたものをここに紹介します。

（阿弥陀仏の本願）  
我を信じ

我が名を呼ぶ  
（ナモアミダブツ）

春は  
攝取不捨

（必ずたすける）

何ヶ月も文字を書かなかった母が短時間のうちに書きあげたものです。驚いた私が「お母さんが書いたの？」と尋ねても、「本当にお念仏ひとつだよね」と言っても、ぼんやりと空を見つめて返事はありませんでした。

これを見て、母は助けたいんだと感じ、胸が痛んだことを思い出します。その後一度だけ寺報の原稿を頼んだことがありましたが、ちゃんとした物は書けず、私が整えて記事にしました。お習字が苦手だった母の最初で最期の書は、浄土真宗のすべてを伝えるものでした。

密葬通夜のご法話で、佐野徹師がご紹介くださった母の文章をここに載せたいと思います。母の人となりを表す私も好きな一文です。

捨てられし梅の古木に真白なる花は千古の香に満ち溢る 妙澄

花屋の店先に無造作に放り出してあった梅の古木を見つけ、「これはどうするのですか」と尋ねたところ「後でゴミに出します」とのこと。私は昔の生えた古木がもつたいなくて拾って帰り、本堂に活けました。蕾も固くみごとな枝ぶりの立派な生花でした。

その後、立春拝賀式にもその古木を芯にして生花を整えました。そのときです。素晴らしい梅の香りに驚いて、暗い本堂を見渡すと、何とあの古木の梅が咲き始め、香りを放っていたのです。

何気ない日々の暮らしの中で、自然が私に教えてくれる尊い営みをしっかりと受けとめて、いのちを大切に生きてゆかねばと、しみじみ思うこの頃です。

（「ともしび」2013年3月10日号より抜粋）

寒い夜には、母がかわいがっていた猫の要が私の寝床に潜り込んで来ます。「かなちゃん、ばあば死んじやったね」「寂しいね」と語りかけます。「ニャン」と、答えてくれることもあります。眠れずに、母のことを思い続けます。叱られてばかり、母の言いつけに従い、あまり反抗することもなく生きてまいりました。目標を失ったような不安定な気持ちです。残された教え「阿弥陀仏のご本願」を支えに、お寺が賑やかであり続けるように頑張ります。

お母さん、今まで本当に有難うございました。

2018年12月5日